

櫻心中

泉鏡花作

一

「太夫、實に、佳い鶯やね。」

軒の

籠の其の聲を聞きながら、公園の中に、面影亭と云ふ、以前は鳴らした事のある女形の地俳優が隠居仕事に營んで居る淺間な茶店。住居と張場を兼帯の長火鉢の前に、のそんと控へて、瘦せた手に、故とらしく澁茶の茶碗を兩掌に据ゑて、箱がきの由緒ある器めかし、何とか千家流に一つ捻つて、びた／＼と口舐ずりの音を立てたのは、顔色の蒼黒い、眉毛の薄い、身のおとろへた盲人である。

が、服装は驕つた、大島揃ひに白縮緬をだら／＼と巻いて、いかに雪國でも、もう五月へ日脚が届くの、福々と見せた同じ緋に膨れるばかり綿を入れ、た書生羽織。おまけに縮緬の襟巻して、柔毛皮の手袋が座蒲團の傍に脱いであつて、黒の中山高帽を鐙下りに、此は被つたまゝで居る。

尤も今しがた来て、座に着いたばかりらしいが、  
對手を太夫と云ふものゝ此の容體は、其の取澄まし  
た横柄さが思はるゝ。それも道理で、此の盲人は按  
摩でない。下川忠雄と稱ふる――實は忠助と云  
ふのであるが名刺は専ら右で振撒く――土地の  
金貸の悴で、やがて四十に近いが、矢張り若旦那と  
此家あたりでは言はせて置く。

「ふう、然う、其の調子。」

もう一度聲を聞いて、ぐたりと成るまで、襟巻に  
撫肩の首を傾けながら、茶碗の縁を小刻みに指の先  
でぶる／＼と弾く、ト異に琴を弾く爪の形に見える。  
もちろんみ  
勿論見せようとするのである。

「何とも言はれんね、太夫。」

目の釣り上つた、髪の薄い、色の青しよびれたの  
が鉛のやうにべとりと塗つた、尖つた廂髪で、時々  
表の人通りを見掛けては、黄色な、けつたるい聲し  
て、

「お掛けやす、一服お吸ひやす、お休みやす。」

と呼掛ける十五六の小女を、盲人の横手に、悪く  
膝を崩して附添はせて、それに茶の給仕をさせつゝ、  
明治初年の女形實川何某は、小縁前でコチ／＼と小

摺鉢をあたつて、鶯の餌を摺る處。

縁前で小鳥の餌を當ると云ふと、如何にも日向のやうに聞えるが、然うでない。

此の邊は、樹立ちが多いのに、裏が直ぐに崖に成る、横に蓮池を控へたので、空は麗かなのにも係はらず、じめ／＼として陰氣に暗い、澤庵桶も見えれば古盥も見えて、小さな池に細い筧の水が流れ、青苔も生えたり、黽も出る。

其處に、七十有何歳にして、のつぺりと眉毛の無い、顔の長い霜げたのが、薄汚れた木綿の藍微塵、黒襟も絲の抜けた半纏、紺の盲縞の、摺餌に黽だらけかと思ふ、前垂して、胡坐も搔かず背くゞまりつゝ、肩のだらりとした體は、翁とよりは媪に似て、昔を偲ばれる、それが寂しく、賣りに出る姫のりを拵へる様子があつた。

「土臺違ふがね。そりや、代ものも代ものやがな、同じ賞められるにしても、若旦那のは、そりや違ふ。お琴のな、ちゃんと、それ音曲の此の、」

と小耳へ手を遣るのが、一寸おくれ毛を搔く風情に成つたが、當の太夫、對手が盲目なのに忽ち心付いて、餘計な所作を詰まらなさうに、不精たらしく、

すぐに懐へ引込めて、

「ねえ、音の出處、聞處と云ふ嗜みが備つておい

でやからね。」

と片手で、ごし／＼。

「然までも無いがね、あゝ。」

盲旦那は、ちゆうと又一口吸つて、身の衰へた割に、ぶくりとふやけた、紫がゝつた舌の尖、春爛な此の陽氣に一層冗氣せた昏に濕氣を與れて、切て、ぐつと一つ仰向くと、薄い眉毛をぴく／＼とさすのが、相手の居所へ見當を付けるのである。

「でも、其處は聊か素人と違はんとね、永年、絃で苦勞した爪に對しても濟まんぞね、ねえ、太夫。」

「然やうでございますともな。」

「尤も、聲を聞くのに、勘が可い、と成るとさいが、此でも、へゝツ。」と、俯向けに成つて、薄笑ひをやる。

と其の笑ひが、變に、鼠色の斑に成つて、譬へば鷹の如く蒼黒い頬に泌出す。

「ねえ、太夫、何となく心持の可いものではない

がね、お互の間や、そんな氣障氣は無しに、ねえ、

太夫。へゝツ。しかし好い聲や、あゝ其處や、何とも言へんがね。」

「眞個、澤山はありますまいよ。苦勞をしましたよ、此の鶯にや・・・・毎年、早春には岨の椿の樹へ来て鳴きますのを、二月三月毎日のやうに狙うて、三年が間かゝりましたが。藪でも、野でも、おなじ鳥でも、質の可い奴は、不思議にな、うつかり人手にはかゝりませんね。」

「然うやとも、大きに、へッツ。」

と例の薄笑ひで、

「其處は昔取つた杵柄で、太夫、女子で経験あるがぢや・・・・何かね、三年かゝつて突留めたと云ふのは、新造かね、年増かね、後家ではあるまいね、」

言ひ掛けて、盲旦那は陰氣な手つきの甲をぶらり、べろ／＼と唇を擦つて、

「堪まらないと言つた美しい、人の女房でゝもあつたかね。」

「一向早や（暗の夜に鳴かぬ鳥の聲聞けば、れぬさきの、）何とやらでございますよ。」

昔の太夫は、耳學間の悟つたやうな事を云つたが、じろりと盲人を視て可厭な顔して、

「どつち道、此の鶯はな、こりや牝ぢやござりま

せんよ。」

「お寄りやす、お掛けやす、一服お吸ひやす。」  
と小女が間伸びのした勢の無い、其の癖突走つた聲を出す。

盲旦那は其の小女に首を伸ばして横面に傾いて、

「通るものは、牡け、牝け。」と洒落に軽口らしく訊ねたが、容子が横柄なものであつた。

「書生さんですげ。」

「はあ、牡の。……書生が靴を穿いて、ばか／＼通るやうに成つては、花見も末や。成程一向に人が出ん。公園の春の眞晝間も、さて早や、寂寞たるものだと言ひたいね。しかし可い陽氣や、溶けさうな鹽梅や。」

と帽子を脱ぐと、軽く膝を撫でるともに、煙草入れを抜いて突立てながら、些とくどいやうではあるが、指の尖で小刻みに道具を弾く。筒を見よかし、煙管を見よかし、自慢なのである。

「唯今、お茶を入れかへます。」

太夫は半纏を摺らしたが、立つても来ず、柱に掛けた藁苞から小さな串にさした、べる／＼と柔かな蒼白い肉を、手焙りに立て、遠火に當てつ、

「陽氣やうきよりかもな、若旦那わかだんな、金子かねゆゑでございま  
さな。」と投なげるやうに言いつて、串くしにさした其その一片ひとひら  
を中指なかゆびの腹はらで一寸ちよつとさば觸ふる。

可怪、昔は藩主が庭前の馬駈場であつたと聞く、  
 公園の此の入口に、六七軒一列に、蓮池だの、間に  
 坂だの、離れ／＼に並んで居る、恚うした茶店は、  
 揃つて柳團子と云ふ草色と／＼白と鳩の卵ほどなを木  
 皿で商ふ。が、太夫の焙るのは、持薬に赤蛙、蝸牛  
 を食ふのか知らず、蛭をぶつ／＼切にしたやうな形  
 で、決して新粉製の其ではない。

「昨今はな、一體不景氣と云ふ中にも、何でござ  
 いまसान。一重櫻が散りかゝつて、此處の、それ、  
 お庭の曲水、八ツ橋の岸にあつて、山も、水も、町  
 も、湖も、三國見通しに根を下るす、あの富士見櫻  
 が盛りに咲きます。――  
 唯今が眞盛りでな。――毎年丁ど今頃に成ると  
 薩張人出がなくなつて、此の通り寂寞としたもので  
 な、……其の癖、光るやうな霞が充満、空も  
 水ち櫻色と云ふ、陽氣だのにな。

先づまめ譬へて申さば、朝が過ぎて眞晝間、  
・ ・ ・ やがて八ツ前で、些と眠氣がさしたと云ふ處。  
酒なら、微酔が過ぎて、これから己を忘れようと云  
ふ境、一寸魔が魅した體で、な人間の世が天地に返  
る・ ・ ・ ・ ・ 凄いほど長閑な、とろ／＼とした、こ  
んな時は、鶯の聲も嘴から紅色の陽炎とかに成つて、  
柳の葉の中を傳はります。・ ・ ・ ・ ・  
鶯が鳴く。

「それ御覽じろ。」と云ふ。軒の  
籠の底を掠めて、串の物から迷に黄色な煙が泳ぐ。

「お掛けやす、お休みやす、一服お吸ひやす、お  
寄りやす。」

「餘計な事やね、鳴く聲さへよければ可い、色な  
んぞ。」

と苦い顔して、

「俺は匂の方や、太夫、負惜みは言はない、  
・ ・ ・ 實際花でからが、咲かずとも可い。何の、實  
さへ生ればやが、それが口に入ればや、ふん。」

仁體造つて取澄ましたのが、急に餓えた獸の如き  
賤卑い面色で、

「いゝ匂ひやね、太夫、何を焼くのかね。」、鳥の餌に入れますよ。」

「上新粉に黄粉、糠に青菜と云ふ中へ、はあ、鮠を焼くのかね。」

「素人らしい、若旦那、鮠なんぞ、お前さん。」

「それぢや? . . . . .」

と引傾いたが、心得ないのを口惜しさうに、

「秘傳と見えるね、太夫。」

「何、お前さん、秘傳と云ふほどの事でもありませんよ。聲をよくするには誰でも用ゐますな。尤も分量は煩かしようござりますがね、鶯を強くするには、此の一薬に限るので、人間にだつて利きませう、それ、」

「はあ、」と狼狽へるばかり急いで聞きたさうに、上目でじろ／＼。

「蠅の肉でござりませな。」

「うゝむ、成程。あゝ、然う／＼。それに限るんだつたいね。」と仰向いて高慢に膝を敲いて言ふ。

其の知つたかぶりを淺間しさうに、太夫は蔑んだ顔をしたが、

「しかしね、用ゐやうに依りますよ。御存じでも

ありませうが、初手から蝮なんぞ食べさせて御覽なさい、羽から煙が出て斃ちますが。だまし／＼ね、始のうちは、蛇の肉を少しづつ、

「それ／＼、蛇の肉を少しづつ。」

太夫は苦笑した。

「だが、御内分に願ひませうで。」

「矢張り、秘傳かいね、は／＼は／＼。」

「何、然う云ふ次第ではありませぬが、言はゞ手前ども、此れ客商賣と云ふ中にも、食ものを商ひます。蝮と同じ火で茶を煮たり、蛇を扱つた手で團子を捏ねるなどゝあつては大事。恚う遣つて、それ別の火鉢で、遠くで焼くゝらゐでござりますから

な。

「構ふものかね、俺なぞは、内ぢや毎日蝮酒や。」  
と昂然として言つた。

が、太夫は敢て盲人に氣を兼ねたのでは無さうであつた。

四

算の水は、絲のやうに、すら／＼と流を捌いて、  
 一度其の下を潜つて行く。店から歩板の橋を渡した、  
 飛石三つ四つ、中庭を一寸隔てた處に、縁側の附いた  
 一棟茶座敷めいた離亭がある。・・・・通に向  
 いた方の障子は閉まつたが、沓脱の上に一足、白木  
 で表つき、都風の駒下駄が脱いであつて、傍に薄色  
 の涼傘が、一本菖蒲の咲いたやうに、蓮池に影を落  
 す。

静な面影亭には、夫戀ふ鹿より、水鶏が慄れて寄  
 りさうな、此の駒下駄のぬしの方が、一人音信れた  
 先客で、其處の障子は、はじめ開いて居たのが、此  
 の盲人の中山高帽が、前のめりの反身に成つて店へ  
 入つた時、櫻がちら／＼と散込むやうに、美しい袖  
 口がちらりと動いて、内から閉めた事を言つて置き  
 たい。

廻縁の、其の茶室の丸窓と、母屋の裏の鶯籠とは、  
 つい小庭を隔てたばかりであるから、太夫が花霞の  
 日闌に鶯の聲に紅をさして話したのも、單に盲人に

ばかり聞かせたのでは無さうな、と同時に、餌の  
蠅の言譯は、其の女客に對したのであるらしい。

が、盲人は一向に氣が附かぬ。……衣の留  
楠の香も立たう。間に水の流れがあつて、……  
地の下をも潜つて通る、別けて女には鎌鼬の如き、  
此の盲人の鼻の働きを遮らなかつたら。

水は清いものである。

でないと言旦那忠雄の鼻は、墓所、亂塔場を求獵  
つて、土葬の年紀を――分けて少い女の年紀を。

「此の分は仰向けだ。横に寝て居る。立膝だ。色  
が白い、髪が長い。」

其の姿までも嗅分けると云ふのである。

「と利くねえ、そりや靦面なものやね。太夫など  
も千軍萬馬、此の裸武者の中を往來した時分には、  
壮に用ゐたものやらうがね、實際一矢にして五人を  
射抜く、……田村將軍ではないけれど、忠維  
大將櫻狩ぢやぞ。」

と傲然としつゝ、白茶けた鼻を仰向けに、海鼠の

如き舌を吐いた。

「へッ酒で其の蝮の氣を吸うてさへ其やもの。

成程、生のもので搗込んで用ゐたら、そりや蝮には利くやらうね。」

「偉いものでござります。……一餌用ゐま

すと、直ぐに其のな、驚の、あの、綺麗な咽喉から、

すんなりとした胸毛へかけて、ぼツと恚う、紅い霞

が走ります、生血の影が湧くのでな。此の聲を聞い

て、其の姿を見るのやもんな、牝はお前さん、何羽

となく、翼をすくめて、ほた／＼と籠の周圍へ、乙

女椿が累つて落るやうにな。」

と仰向いて籠を見ながら、串の蝮を裏返す。

盲旦那は、横押しに膝行つて、斜ツかに肩を聳

かす、其の肩が、ぶる／＼と震へる、と見ると、目

鼻も眉も相好が一度に崩れる。

「まさか、まさか、太夫。」

「眞剣さな、若旦那、お前さんの前で云うては成

らぬが、……御免なされや、外に言ひやうは

なし そりや、お目に掛けたうござりまसान。雌  
の方は色戀にもせい、まだ可恐い事には、勢と力に  
まけるかして、雄の鳥が此に向ふと搔窺んで落ちま  
すぞな。」

「雌は固より、そりや可いがね、雄の鳥さへ窺ん  
で落ちるかね。へゝツ負惜みは言はんね、あやかり  
たいね、些と煎じて飲みたいね。」とニヤリとした、  
が、寂しい顔色。

「お休みやす、お掛けやす。」あの駒下駄に、  
ひら……ひら……と蝶。

## 五

「黒焼にすりや尚ほ利きますな、煎じて食りたいくらゐなら、……そりや思召次第でな。」

と串戯らしく、其の癖眞顔で、額に陰氣な皺を刻む、と孤家の媪のやうに、太夫の姿が暗く成つて、魚の目のやうなのが濁つて光る。

「鶯の黒焼かねーふん、こりや利く利かぬは別として、大名道具で面白いや。」

又傲然たる態度である。

「でありますがな、若旦那。」

と太夫は、ねつゝりと壓へて、

「飼手が難行苦行をしてまで、不斷、此の餌で馴らした逸物……胸毛が紅う霞んだのでございませんとな。」

「勿論、然うやとも。駄鶯の黒焼なら、寒雀の方が暖まる。……餌やね、太夫、餌が大事や。」

何かね、其處に其の一味を調合に及んだと云ふ奴があるかね。」

「ございますともな。」

「遣はされ、此へ一寸遣はされ。」と、言まで、さもしく成つた不具の可哀さ、効性なさうに、垂

下と掌を下げて出す。

「や、お舐めなさる？ 何うなさる。」

「仔細ないね、鳥が啄く果實なら人間に何でも食へる。別して鶯の餌や。あの聲で蜥蜴ぢやなからうが。」

ところで、小女の方へ傾いて、當世の衣紋を繕ふ。

太夫は乳棒くらゐな青いを持つて、長火鉢の對座へ出た。

「一服お吸ひやす、お休みやす。」

「ですがね、若旦那、實の處、此の餌は、分量が其の、秘傳なんでござりましてな、お前さんのやうな、うまいものを食ひつけ、舌尖の鋭い方には直きに悟られて了ひますが。．．．然うすりや、早い話が、同じやうな鶯の名鳥が、他にも出来ようと、まあ、云つた勘定でな。．．．處で、私も、早や、打明けた處死慾でござりまसान。．．．御相談によつては黒焼を承知で娘を献上、と云つたやうな次第でな、第一、此の長蟲を餌ひます小鳥は、其の氣を慕うて、頻に長蟲が狙ふのでな、幾條もそれ、

梁はりや天井てんじやう、籠かこの周囲まはりを傳つたひますが、其それを追退おひのける手てあ當ただけでも、一方ひとかたならぬ苦艱くかんなのでな、餌えも無代たゞぢや、はゝゝゝは。」

勢いきほひない徒笑むちむちで、

「いや、串戲じやうだんではないのでしてな。しかし、他ほかならぬ若旦那わかだんなの事ことでございますりや、」

「買かふよ、とに角かく、澤山たくさんはない驚びっくりやからね。尤もつとも

値ねとも相談さうだんやがね、太夫たいふ幾千いくせんで譲ゆづる氣きかね。」

「位ゐいへは百兩ひゃくらう。」

と古御所ふるごしよへ化ばけて出でるお公家くげの形かたち、背せくゞまりに、件くだんの小摺子木こすりこぎを笏しやくに取とつて、額ひたひでじろり。

「言いひ値ね七十兩しちじゅうらう、まけて、六十五兩ろくじゅうごらう、ぎり／＼五十

兩りやう、思切おもひきつて四十兩しじゅうらう、若旦那わかだんなによつて、三十兩さんじゅうらう、

もし、高價たかいと思召おぼしめしては怨うらみでござります。失禮しつれいな

から、親類しんるゑい交際あひまひでございませな。」

「俺おれは下川しもがはや・・・其處そこら等らなら相談さうだんしよう、

尤もつとも、豫かねて用立ようたてた分ぶんを差引勘定さしひきかんじやうでは何なんでもないが

ね。」

「へい・・・」と氣き抜ぬけのした返事へんじ。

「しかし、一兩いちらうや二兩にらうなら、直すぐにも一藥いちやくに用もちゐて可いいがね、三十兩さんじゅうらうの黒燒くろやきは即座そくざには肩かたが張はる、四

五年ねんか餌ねつて、俺わいの琴ことを弾ひく對手あひてでもさして歌うたはせて

鳴なかせて樂たのしむか、なし崩くづしに易やすいものや、・・・・

處ところで餌えやね、尚なほ更さら心得こころえのため遣つかはされ。」

「此こゝに、」

「成程なるほど。」

鶯うぐいすが鳴ないた。

離座敷はなれざしきの二子窓れんじまどに人ひとの氣勢けはひす。

蝮まむしの餌えさはびく／＼と盲めくら人の咽喉のどに動うごいて、青あをい舌した

舐なめずりをしたのである。

小女ちびは、猪首あくびに横よこを向むいて、

「お掛かけやす、ー」を皆みんなまで云いはず、ぐつ

と呑のんで、

「へい。」

障子しやうじの裡うちで優やさしく手てが鳴なる。

## 六

小女が歩行の板を渡る前に、別室の障子は先方から開いて、紋着の黒縮緬の羽織の片袖、肩を支ふるやうにぞろりと疊に支いて、片手を棧に掛けたまゝ、大島お召の一枚小袖、袷深く着た膝を、横に浮かした姿を斜めに、張のある凜とした目の、妻も優しい睫毛、涼い眉、媚かしくて氣高い衣紋は、春の水に藤が映る。・・・

唯、袖に近い一盆の柳團子も、十五の月の面影に、玉を捧げた趣がある。

「女中さん、」

小女は、くしゃんと細縁に坐つて、

「へい、」

「お帳場へ行つて御主人に伺つて下さいな。」

「何でござりますか。」

いや、太夫より、盲旦那が此方で聞耳を立てた事は！ 驚いたのと慌てたのと、不意を啖つて、何でも心得た筈の自尊心を傷つけられた口惜しさと、癩と、もの珍しさと、嬉しさと、顔中に渦を巻いて、

鼻は嗅がむとし、口は喋舌らむとし、額は睨まむとし、眉は氣取らむとして、ぶる／＼びく／＼と動くのが、手の先へ傳つて、蜥蜴の尻尾の動くが如く、件の摺子木を火鉢に突込んだが、真正面に向直つて正氣付いたやうに、衣紋を直すとは、

「あゝ、驚やな。」

と、てれ隠しらしく、然も傲然として、人を侮つた事を言つて、

「何とも言はれんね。」

こゝで、ニヤリとして身體を靜める。

太夫は盲人のぢたばたする目まぐるしさのものを紛れで、其の端麗な女客の聲が聞取れないのを、苦々しがる顔色で、火箸でぐい／＼と弾くのが、蝮の擗んだ摺子木に掛つて、何故か灰寄せの形に見える。

「何とおつしやるかな。」

小女が歸つて来た、取次ぎを待兼ねて太夫は先んじて聲を掛ける。

「あの、」

「何だとな。」

「お客様が、あの、おつしやるのでございます。」

「素敵な、美人、聲で分る、違ふまいげ。」と盲人はありつたけ聲を密めて、二人の眞中へ堪らなく溶けさうな顔を割入ると、口の臭さに、太夫は、むかりと来て鼻を蔽ふ。袖の捌きは女形。

「餘り、あの、鶯が好い聲で、其の姿が見たく成つた籠を持つて来て、一寸見さして下さいませんか。……然う言うて来いと、あの、おつしやるのですのや。」

「ようござります、可いともな。それ、籠を下して持つて行つてお目に掛けな、……氣を付けるだよ、いけ粗雑だと鳥を遁す。」

「聲の好さゆゑ姿が見たいと 太夫、三十兩がものは出来た。」

小女は聞いた値段と、雲に乗つてるやうな人の、わざ／＼の、いひつけとに、急に變つて鶯が尊く成ると、軽く、ひら／＼と籠に飛ぶのが、黄金無垢の踊るが如く響くかして、重いものゝやうに、兩手に据ゑて、危かしい据腰に、目七分ぐらゐに歩行板を渡つて出る。

面が面で尖つて居るので、  
・ ・ ・ ・ 却つて、そ

れが狐の狙ふやうであつた。

美人は待つ間、片手を支いた、其のまゝに、まつ

げを濃く品の可い、そして色つばい、艶やかな圓鬚

で俯目に成つて、熟と其の駒下駄に舞ふ蝶を視て居

た。

「鶯や。」

と呼んだ聲は、其の鳥の妙なる唄より朗かに、袖に添った朱塗の籠。――雪の下に格子を赤く塗る國は鳥籠も紅な、――それが直ぐに、美しい膚を包む、八ツ口を漏るゝ長襦袢の模様であつた。

氣勢も姿も花やかな中に、唯一筋、水淺葱の薄いの、千鳥を絞つた絹縮みの下締の、胸を擣に切めたのが、顔に影を映すまで、もの寂しく装を沈めて、錦葉を流す水である、紅梅に射す月である、とゝもに、黒髪の艶はくつきりと緑が増つて、鼈甲の櫛が照映ゆる。

「手鞠唄のやうだわねえ。……鶯や。」  
と莞爾して、色白な顔を、其の朱い籠に近づける、唇は宛然に一輪の蕾である。

「偶々来て、逢ふんだわね、あい、」  
と見惚れて恍惚したやうに頷きながら、  
「お前さんね、お腹が空いても變なものを食べるんぢやありませんよ。……可いかい、蝮が欲

いのなら熟として此處においで、可厭なら、籠を出ておくれ、分つて？ さあ、

と云ふと齊しく、白い手が軽くかゝると

籠の戸をスーツと引く。赤い竹は、あの水色の下締を切つて、銀河に流るゝ幻の筏に似て乗るぞと見え、鶯の影は、輝くばかり萌黄の星、颯と翼を翻へして、一文字に松の梢へ、長閑さの重り累る眞綿のやうな風を鳴した。

「あら、あら、破亂だ、破亂だ。」

太夫は夢中で、ふら／＼と成つて、魂を宙に店頭へ踰けて出たが、どんと框へ尻を突いて、はじめ遁がした婦人を視た。大業ではない、血相を變へて居る。

「何をしさらす、狂人め！ 自由廃業の化ものかい、籠の鳥を遁すなんて、途方もない、悪戯にも程のあつた、これ一通の事では濟まんぞ。おい一體何處の何てものや。」

と横押に、框を摺り、框を摺り、土間へぶら下げた足で、穿きものを捜しながら、半ば、松の葉に瞳

が亂れる。

婦人は籠を片寄せて、小縁から、褌を落すと、前髪  
の艶に翠を籠めつゝ、軒の柳の絲はづれに、鶯の  
遁げたあとを、打仰いで澄して居た。

「女中や、女中や、其の女を、其、其の女を壓へ  
て居れ、遁がしては成らんど。」

「御主人、遁げたのは鶯ですよ、私は遁げはしま  
せんわ。」

反身に投げた縁の腰は、柳が霞に寝た姿。

「太夫、太夫、鶯が遁げたんやね。」

盲人は居直つて更まると、何故か中山高帽をぐい  
と被つた。

「遁げて堪るかな、其、其處に居る女が遁がした  
んや、途方もない。」

「否、遁がしたでは濟むまい、かどはかしだ  
ね。……君、君、おい、君。」

仰向けの頤で見當をつけながら、盲人は膝行つて

出て、婦人の方に掌を突きつけて、

「串戯ではない、君、こゝに三十兩と云ふ買手のついた驚なんや、こゝの主人が承知をしても、俺が肯かん、うむ、下川忠雄が承知せん。」

「誰が承知をした處で、私が此のまゝに濟ますものか。」

「女中さん、」

と婦人は懷紙を二三枚、手を拭くやうに取りながら、中庭にきよとついて居る小女を呼んで、

「お茶代を。」

と金貨が一枚、牡丹、花白うして黄金の蕊、怪しく手で咲かせたやうに縁に残して、沓脱を靜に下りた。・・・

「御不足でしたら、松村雪と呼んで下さい、これから三好屋に食事をして、日暮れるまで其處に居ますから。」

目の盲ひたのと、口の開いたのと、尖つた面の白けたのと、三人を、化もの芝居の古看板に茶店に残して、蓮池添ひに馬場へ出た。

こゝと、人車の道を、並木の如く松で劃る、坂下  
に百箇堀と云ふのを隔てゝ、花の雲が浪を寄する、  
舊の城の天守が見える。

其を仰ぐやうにして、鶯の立隠れた、中にも梢の  
高いのを見た、涼傘を、ほんのりと鬚に翳すと、ま  
だ咲かない松の藤が、颯と色に出で、美しい影を戯  
に鞠の如く投げ返す。

堀を隔てゝ、城を彼方に、恁くて、静々と並木を  
行く婦人の姿は、恰も人なき故道を、世を離れて一  
つ通る、艶麗な女性の星のやうであつた。

「失禮、自分から申出しますのも如何かと存じますが、御挨拶までに。私は宮田七穂と申します。東京で一學校を出まして、不束な翻譯をして居ります書生です。」

夜分、しかも此の公園は廣うございます。そして、朧ながら櫻月夜の明い處がありますものを、樹の茂りました榮螺山の下の暗い處で、不意に、お呼留め申して、嗚ぞ貴女は不氣味にお驚きなすつた事と存じます。しかし御無禮をさへお許しに預れば、決して不都合な、怪しかりませんもので無い事だけは、確にお誓ひ申します。」

「否、そんな御心配には及びません。」  
 と靜に答へたのは、森の暗さに、夢のやうな、驚に似た聲である。

男が、吻と息を吐いた。

「然うした貴女の清いお聲、明いお言葉を承はりますと、尚ほ冷汗が流れます。貴女は先刻から、曲水の周圍を霞ヶ池の汀を。そして船橋をお渡んなす

つて、此の榮螺山の森の中へ、

唯一度も、背後を振り返りもなさらないで、静にお歩行でありましたから、お心付はなさいますまい。

私は、唯今眞盛りで、夜目には暖かい雪が積りましたやうな、あの富士見櫻の處から、貴女のお姿を見ましたのです。

此の公園第一の見晴しに、加越能の三國の袖を翳して、遠い芙蓉の湖に影を宿すと言ひます、富士見櫻の花の枝に、肩を抱込まれたやうに一人ゝんでおいでなさいました。それが、お姿を見ました最初だったのです。

其處を、お離れに成ります時、三好屋で、人よせに立てゝ置く、雪洞の唯一つ残つたのが消えました。雪洞には、唯美しい蠟燭の動くやうに見えましたのが、消えると朧に浮いて、月の影に、ちら／＼と花が散る、櫻の下の、其の曲水に架けた八ツ橋を、縦に横に、お袖のまゝに柔かい板が撓ふやうにお渡りでした。

ですが、お顔は見えなかつたのです。

たゞ、浅い水を出た石に散つて、流れもしない花の影を、映つた貴女の面影のやうに視めました。

霞ヶ池は道を隔て、見渡す限りほんのりと、  
・ ・ ・それが、富士見櫻を充滿に映す大な姿見のや  
うに見えて、こゝに聳えた榮螺山は、其の姿見を捧  
げて突立つ、黒奴の仙人らしいのです。が、貴女が、  
お寄りなすつた汀には、朦朧として、龍頭の屋形船  
が浮いて居た。 ・ ・ ・矢張り三好屋の遊船なので  
す。けれども餘り靜に、餘り寂しい、其の屋形船は、  
貴女一人に纏つてあつて、貴女はそれに乗つて、何  
處かへ行つてお了ひなさるのぢや無からうかと思ひ  
ました。 ・ ・ ・ ・

彼の聲はふと途絶えた。

二人の足許の石を奏で、小鳥と小鳥と、寝もの  
がたりを囁く如く潺々として流るゝ水は、霞ヶ池を  
細く捌いて、十三の絃に落つるので、やがて此の神  
秘の森を出づるとゝもに、白絲の瀧と成つて、櫻が  
包んだ巖にかゝる、 ・ ・ ・懸る時白く、揺るゝ  
時薄紅に、翻る時仄に蒼い、 ・ ・ ・朧の月は  
幻に、山の彼方を思はせる。

忽ち我に返るやうに、

「あゝ、貴女、何處かへ行つてお了ひなさりやし

「ませんか。」

と却かへて一歩引ひとあしひいて言いふ。

花はなが揺ゆるゝやうな幽かすかな氣け勢はひは、暗くらきに息いきする女をんなの

胸むね、それが、水みづよりも高たかく響ひびく。

「否いゝえ、こゝに。」

「それは難有い。しかし、くだらないお話しをして、貴女は聞いて居て下さいますか知ら。」

「承はつて居りますとも。」

「感謝します、が、恐縮です。何だか廻りくどいことを言ひ出しまして、お煩さいでせうけれども、肝心申上げようとすること、餘り失禮な事なので、はじめから仔細を申上げないと、如何にも言譯がありませんからなんです。・・・」

それから、池の水の捌け口を、船橋をお渡りなすつた。それにも聲音が聞えないくらゐ、静にお渡りだつたんです。――そして、此の森へお入りなさいました時、

もし、御婦人、御婦人の方。

思ひ切つてと申すのが、實は浮り、我を忘れたやうに成つてお呼び留め申しました。聲が出ると私は、ツと思つた。

あゝ、聞えないでくれゝば可い、・・・聞えない振りをなすつて、ずん／＼行つて下されば可い、懋ひお聞きつけに成つて、何の用と言はれたら、さあ何うする、何と言はう。私はどぎまぎしました。

何故と言ふのに、いざ其の申上げようとする事が、  
餘り法外な事なんです。

貴女、私は此の土地のうまれです。久しい間東京  
に參つて居ります。まだ十代の頃に兩親とも亡くな  
つて其の墓が貽つて居ります。

墓地は町に近い山の上にあるんです。市の方で手  
を入れて、今度其の邊、墓地一帯の土地の遊園地に  
拓きますので、墓を移さなければ成りません。――  
其の遺骨を引取りに參つて、誰の印、彼の保證と、  
それ／＼面倒があつて、まだ事が濟みませんので、  
逗留をして居ります。

不幸な子、不束な悴だけ、二十年、三十年振で逢  
ひます兩親の白骨に對して、心には精進し、身體に  
は謹慎をして居ります最中、法外な、失禮なと云つ  
て、貴女に對し、怪しい、不埒な、そんな意味な事  
は聊かも存じては居らんですが。」

七穂は一息つきながら、  
「貴女、あゝ、申悪い、・・・・と云つて、お  
呼び留め申して置いて、黙つて居ては尚ほ濟まない、  
御免下さい。」

「まあ、何でございますえ。」と、力は籠めたが

優しい聲。

「御覽下さい、暗うございますけれども、私は袖を顔に當てゝ居ります、そして申します。」

「あれ、私こそ、お恥しい、手巾で口を壓へて居るんですよ。」

「お人の悪い。あの櫻の枝に抱かれたの、袖にちら／＼花片だの、八ツ橋の後姿、船頭も居ない屋形船が、霞ヶ池の汀について、私を迎へに来て居るやうだの、船橋を渡るのに、靜に聲音がしなかつたの、と淺薄な女の氣には、どんなに美しくでもあるやうにおつしやいます。……池の下の別の世界の水の底に、霞が沈んだやうなお話し。寂寞した朧月夜、袖がぞんざいに動いても、花の散りさうで成りませんのに、極りが悪い、私は少し酔つて居ます。……もしか、お酒の香ひがいたして、急に愛想をおつかしなさりはしまいかと思つて、自惚らしうございますけれど、……口惜いから、それで、あの手巾で、……尚ほ氣障ですかも分りませんね。」

七穂は何か勢づいて、

「あゝ、微醉で在らつしやる？」

「堪忍して下さいまし。」

「慶す可し、祝福します。勿論、はじめお聲を聞いた時、すぐに私が思ひ誤りました事が分つたのです。其がために尚ほ言悪く成つたのですが、奥さん。」

「それに、はいとお返事を申しませうか……今日けふは圓鬘まるまげに結ゆつて居をりますから、」

「嬢さん。」

「些ちつと年増としまでございますわ。」

「弱よわつた。」

「松村雪まつむらゆきと申まをしますんですよ。」

「あゝ、松村さん。」

「はい、ほゝゝほゝ。」

「否、笑ひ事ぢやありません。」

七穂は腕を組んだ袖の音。

「お心易く、嘘にもお腹立ちのありませんのを力

にして申します、私は、實は、貴女が身投を？・・

・・・

「え、」

此の場合、言葉を濁すは却て禮を缺くと思ふらしく、彼は疊掛くるやうに、あとを繼いだ。

「けれども毒藥を召食るか、――自害を、刃も

のをお用ゐに成るか、兎に角自殺をなさりはしまいかと、心配で憂慮で危なくなつて成らないので、それ

で、つい、お呼留め申しました。次第は唯これだけ

です、謹んでお詫をします。」

「何うしませう。」

と身動ぎに、床しい薫、はつとして、一寸、聲が

途切れたが、

「貴方、こんな厄雑な女ですもの。もしかします

と、お目違ひでないのかも知れませんよ。」

言ふことの串戯らしさ、續くべき笑聲を期待した

が、それなり眞面目らしく、夜の森は陰氣に沈む。

が、それなり眞面目らしく、夜の森は陰氣に沈む。

「・・・事を お缺きなすつた、・・・お戯れも、ものに因る。・・・僥倖に、言葉をお交し下さいました、お聲だけでも、もう美しい方が夢枕にお立ちのやうに、お行方も分りました。怪我にも、そんな自殺をなさらうなど、は思ひません。――だけ猶更、極りが悪いんですが、自分勝手に負惜みを申せば、此の森、此の築山は、公園の良に當つて唯一ヶ所、鬼門だと申します。・・・あの、富士見櫻と町を隔て、川を隔て、卯辰の山の端に向ひ合つて、大な松の樹の、幹が五株に分れたのがあります。其處に棲む魔の神が、時々此處へ遊ぶと言ひます。お威し申すのではありません。其の松のあります山の奥に、高い丘に、まだ引取りません、兩親の亡骸があるんです、餘り久しぶりなので、其のまゝ生きて居るやうに思はれます。瞳も眉も御覧あれ、父母の子の私は、誓つて貴女に仇心は持ちません。道が暗いんです。貴女の其處には石の橋があります。獅子、虎 虎が狼のやうな形をした自然石があるんです。渡つて、白絲の瀧の崖を下りて、茶店のあります處まで、お見送り申しませう。此の魔所を、森の中を、安らかにお出し申す

だけを、お優しさで、せめての手柄、男の面目にさして頂きたい、・・・・さあ、静にお運びに成りませんか。」

「あゝ。」

と出足を前に立つて遮るやうに、婦人は袖を擧げたらう、手首の白さが仄見えつゝ、見透す黒髪は隠るゝのである。

「貴方、一寸待つて下さいまし。・・・・お志、

お言葉も、分けて松の影の、山の上において遊ばす、御両親の御遺骸に掛けて下さいます。私は骨に刻みます、身に染みますほど嬉しいんです。

で、あの。」

媚かしく花やかながら、合歡の、夜は蒼む嬌態が添つた。・・・・

「貴方に、少々お伺ひ申したい事が出来ましたよ、御迷惑でせうけれど。」

「迷惑處ぢやありません、が、お心の解けました上は、早く、臙でも、花霞でも、月の下へ参りませう。そしてお話をいたしませう。こゝを魔所と申しますのは、昔からの言ひ傳へ、造りごとではありません。雖然、私は信じます。今時何も・・・・申

さないでも、貴女だつてお恐れはなさいませうまい。  
しかし間違ひがあると不可ませんから。」

「そんな處と御存じで、お呼留めなさいましたのは誰方ですえ。」

「え。」

「落ちますほどの崖もなし、渦く流もありませんが、足許は明くない他國のものと御承知で、此處へお引留遊ばしたのは誰方でせうと申すんです。」  
七穂は口吃した。

「それは、……それですから、先刻から一生懸命お詫を。」

と彼は吃りながら云ふ。

「あれ、お眞面目に。御免なさい、決して、それを、とやかう申すものではありません。ですが、此處で、矢張り此の暗い處で、お聞き申したい事があるんです、……私も可恐いとは思ひません、もしか、魔が来て威したつて、私は何うせ可いんです、間違ひがあつても構ひません。」

世にも麗なる御方、眞個に差支へはないのですか。それ／＼、崖を螺旋に巖を削つた樹の間の道に、

石橋いしばしの袂たもとなる虎とらヶ石いしの陰かげに、  
雙ふたつの黒くろい影かげの蟠わだかまつた  
のを御ご存ぞんじあるまい。

「あの、お聞き申したいのは外ではありません。何故つて云ふのぢやないんですけれど、貴方は何うして、私が死ぬ、自殺するかも知れないとお心付きに成りましたらうね。」

「大事な事です、それを申さなければ成らないのです。——一言で申せば、お顔は知らずに、唯後姿ばかりを見た事なんです。・・・貴女、失禮ですが、煙草を喫みます。」

「さあ、何うぞ。・・・そんな御遠慮をなさいますやうな人品なのではありません。ですが、燐寸をお点けなさいませう。・・・私は恚うして居ますわ。・・・吃驚なさいますと不可せんから。」

彼は故と見ないやうに、傍目も觸らないで火を、目と鼻の間で点じた、それでも、同一うしろ姿を、はじめよりは鮮麗に、くつきりと白い襟と、圓鬚の艶を見た。齊しく色に立つたは、黒縮緬の羽織の紋で、それは梅鉢の裏であつた。

で、婦人の衣が、する／＼と柔かに冷く近づいて、  
我が袖に、指尖の、そつと觸れた時、七穂は、過去  
つた雪を捜つて、こゝに櫻咲く朧夜の底をヒヤ／＼  
と何處へか沈んで、春を後戻りしつゝ、梅の花に手  
が届いたやうな心地がしれた。

衣の薫も、氣勢の香もそれであつた。

「些とお掛けなさいまし。．．．石は水が近  
くつて濕つて居ますから、此方へ。」

崖の樹の根へ、手巾の、それも梅ヶ香。

此より先、燐寸の火は、水にも届かず消えたので  
ある。

「山に伏す故に、山伏で、野宿くらゐは慣れて居  
ります、貴女の手から敷きものなんぞ。」

七穂はそして腰を下した。

「では、私も敷きますまい。」  
婦人は地に居て取つた七穂の袂を離して、すらり  
と立ちつゝ、梅の小枝に手を掛けた。

「何方へ。」

「此處に、高い處に、樹の枝に留まつて居ります、  
ほゝ鳥のやうに。」

「御紋を見ました。鶯でせうな。」

暗にも笑顔が面影に添うて、

「鶯はもう遁げました。――此は貴方の御存じ

ない事、梟にでも鳥にでも、さあ、今のを聞かして

下さいましな。」

「丁ど十年前以前です。貴女と同一うしろ姿の一人  
の婦人を、同じ處で、同じ場所、――日は忘れ  
ました、が、月も今月、此の公園の花の中で見た事  
があるんです。」

「まあ、」とやゝ沈んだ聲なり。

「ですが、勿論、貴女より、寂しい冷い姿でした、  
たゞ一重があちこちに、もう些と残つて居て、富士  
見櫻は咲沈むと云ふ盛りの夜。月が、そしてもう少  
し澄んで居ました。も一つは、其の婦人は髪を櫛巻  
に結つて居て、紋着ではない、縞の羽織を着て居た  
のです。」

はじめて、其の婦人のうしろ姿を見たのは、馬場の茶店の中に面影亭と云ふのがあります。時刻は今夜よりずつと遅い、で、店は、閉つて居ました、が、暗い其の軒下を離れて、松並木へ、片明りに成つて出た處だつたのです。」

婦人は聞いて息を擬した。

「次に目に留りましたのは、瀧の茶屋と云ふ、これは料理屋ですし、足許の此の水の落ちます白絲の瀧の下に、細い殿づくりに出来て居る、其の張出しの棧敷の前を、廊下を傳ふやうに、飛石を渡つて行くのを、私はふと傘形の四阿の陰から見ました。」

が、崖の暗い處で隠れました。……寸分違はぬ、うしろ姿で。」

「其の姿は、花が包んで、其の頸には月が映し、霞が袖に漾ふのを、やがて富士見櫻の樹の下で見たのです。

それからは花に分れて、八ツ橋を渡つた道、池の汀も、船橋も、消えるやうに此の森の中で見失ひましたまで、・・・貴女が今夜、彼處から此處へおいでなすつたのと些とも違ひません。・・・矢張り寂しい夜でした。風もなし、星もなし、何處かの隅には人かとも思ふ、夜鴉の影はさしながら、此の廣い公園で一人一人に出逢ひませんでした。

如何にも寂しく、それが、この櫻から拔出して、月に向つて、うしろ姿で一人行く、衣服の縞目も宙に浮いて、朧な其の自分影に誘はれて歩行らしいのが、哀に、果敢なく、世にも便りなさうに見えて、そして餘り静で、聲音が聞えなかつたのです。

面影には月あり、黒髪には花があり、眉には霞が

ありながら、駒下駄か、何か、其の足許が唯影らしい、幻らしい・・・其の癖、あのくらゐ落着いた、しとやかな、氣高いほどな裾捌きは見た事がありません。まるで美しい水が、音もしないが流るゝやうで、雲のたゞずまひにも似て居ました。

それは貴女も肖如なんです。

が、肝心、お話をしなければなりませんのは、然うした態度が、何うしても何處かへ、死にゝ行く人らしい。

果して、其の婦は、其の夜のあけ方に、此の公園の並木の下、あの百間堀へ身を投げて亡くなつたんですが。

木の葉も動かず、美人の手は枝ながら寂寞して居る。

「それ以來、死を覺悟した人の姿ほど、端麗で、正肅で、侵すべからざる、威のあるものはないのはなからうかと思ひますくらゐ、其の姿の動くに連れて、其の空ばかり、却て雲を拂つて、月も冴えるやうだつたんです。

それがです・・・何となく同じ思ひの氣を感じたのかも知れません。其の當時、實は然う申します私が、色戀や何かなら可し、意氣地のない、弱い、だらしのない、しかし實際活くる道のない、貧困骨に徹して糧の得られないために、死場所に魔誤ついて居たんですもの。

世にたよりのない時は、寢靜まつた、人の軒、寂しい水、ぬしのない花、ものいはぬ石や岩、橋の欄干がたよりに成ります。茶店の軒下、瀧の家の廂つき、富士見櫻、おなじ場所を辿つたのも、果敢ない星の道なんでせう。

御婦人、一寸・・・

的切死ぬものと思はれますから、聲を掛けよう、聲を掛けよう、そして助けよう、勿論自分が其の仕誼で人を助ける處ぢやありませんけれども、死ぬのは何も貧苦には限らない。・・・思留まらせたくツてならなかつたのに、何うしても、（姐さん）とも、（貴女）とも口へ出して呼べなかつた、力の

有無ぢやないのです、恥しかつたんです、極りが悪  
かつたんです。馬鹿が、ー 若かつたんです。氣  
障な色氣なんです。虚飾です、負惜みかも分りませ  
ん。

雖然、此の森で隠れてからは、崖を轉がるやうに  
慌てました。追縋る勢で、百間堀まで駈けて行きま  
したが、其の土手百間の間、月夜を見通しに影もな  
い。．．．．．彼これ一時だつたでせう。

遙に町の方で、辻を行く駒下駄の音が、幽にカラ  
コロ二三度響く。

死場所を變へた。

大川へ、．．．．．」

十三

「一條、町中を貫いて、青塗の橋のかゝつた、水が淺葱に流れる、麻野川と云ふのがあります。其の川端を朧月に、私はぶら／＼と歩きました。・・

橋を渡れば、もとの土手に、渡り返せば向う岸に、いつも大川一つ間を隔てた縁を、影のやうに、其の姿が動いて居るやうな氣がしたのです。

が、それは幻だつたのです。婦は明方、百間堀で亡く成りました。死骸の筈をこぼれて、髪が地に敷いて流るゝやうに長かつたと云ひます。私は昨夜の櫛巻が、其のまゝ、目前へ散るやうに思ひました。

手巾の工場の刺繍の女工だつたのです。・・・・  
 良家の人が落魄して。・・・・入組んだ事情も何にもない。當日絹の手巾に、彩糸で藤の花の刺繍が出来上がる。優しい眉、美しい瞳で熟と視て居たが、下繪には描いてなかつた、水を、あの觀世水を、太白で縫ひましたさうです。すると、豫て口説き／＼嫌はれて居た、工場の主人の盲人の奴が、生意氣だ、

暇潰しだ、と投出したので、泣いて詫をして悄悄と  
内へ歸つた、其ツ切、御飯も食はず鬱込んで、観音  
様へお参詣をすると云つて、不斷着のまゝ、家を出  
たのだと云ふんです。

聲を掛けて慰めたら、死なゝかつたのかも知れま  
せん。今でも残念だと存じます。

新盆には其の秋、心細い道を探して、其の人を葬  
つたと云ふ寺を尋ねました、切籠と云ふ、小さな行  
燈形の燈籠を備へるのが土地の習ひです。寺の本堂  
で、燈心に灯を貰ふ時、・・・改名でも知つて  
る事か、――此の春、身投げをしました美しい人  
のお墓所は、どちらです。――私は自分で顔の染  
まるのが分りました。露深い草の中に、ほの白い顔  
が見えたのです。それは切籠の燈籠の影だったんで  
す。蟲が鳴いて螢が飛びました。

私は、やがて草鞋穿で、東京へ發程たのです。  
年月を経ても忘れません。

其の人が、花やかに成つて、同じ處を、同じ姿で、

今夜、公園の櫻の中を又歩行くやうに見えました。

御容赦を願はなければ成りません、其が貴女です。女神とも、天人とも、人を離れた御様子、其の時の口惜さにつけても、何しても、死に、行く、覺悟したお姿としか見えなかつたのです。思切つてお呼留め申したのです。」

「あゝ、貴方。」

沈んだ聲して、

「お亡くなんなすつた、其の方が、貴方の背後

に、

「えゝ、」

「後姿で立つて在らつしやるやうですよ。」

七穂は思はず悚然として突立つた。

「お袖につかまらして下さいまし、……私  
も凄くつて成りません。」

「御保護を申し上げます。」

と縋つた其の手を、緋の羽織の袖を隔てゝ、包んで彼は確と取つた。

「飛んだお話をいたしました。」

「否、眞個に嬉しいんです、貴方の御覽に成りました、其のお美しい、それは、其の方が貴方を募つて、今夜此處へおいでに成つたのかも知れません。」

「飛んだ事を、人の悪い……御自分でも氣味を悪がつておいでの癖に。」

「ですけども、私を御心配下さいました、貴方の目は違ひません。……人の命を危ぶんで、縁も由縁もないものに、言葉をお掛けなさいました、何の、それに御遠慮が入りませう。私はお禮を申します、串戲や、浮いた事ではありません、私は死に、行く氣です。死ななければ成らないのですもの、ねえ。」

「そんな、又……」  
戯として打消すには、婦が餘り眞面目なのである。

十四

「まあ、貴方、」

と先を取つて、男の氣を壓へるやうに、

「お疑り深い、外の事とは違ひます、死ぬと云ふに、嘘や串戯があるものですか。」

「聞き棄てに成りません、もしか、眞個だとすると、何う云ふ理由で、死ぬの、活きるの、さうした事がおあんなさいます？」

「理由を申しましたら、……貴方何う遊ばす思召、死ぬな、とお留め下さいますか。」

「申すまでもありません、……屹と留めます、……無理にもお留め申します、是が非でもお留め申します。」

「でも、何うしても死ななければ成りませんでしたら？」

「或は金、或は力、或は義理、或は秘密、彼は聲を掠めて呼吸を引いた。」

「神のやうに、佛のやうに、上に居て、貴女に死ぬな、と云ふ力はない。勢もありません。何事も忍んで、堪へて、死なういで下さいと、下に伏して跪

いて願ひませう。」

「あゝ、勿體ない、世間に唯一人でも、お優しい貴方があると分りましたら、あの、其の時の御婦人も、死ぬのを思留んなすつたでせう。もしか、自殺をするのでしたら、何を何う身に代へても屹と思留まります。ですが、ですが、私は、私のは、死ぬのは覺悟しましたばかり、卑怯なのです、未練なのです。苦しいのです、生きたいのです。．．．．．自殺をするのではありません。人に殺されるんです。」

「人に？」

「えゝ、人に斬られて死ぬんです。命を斷たれて枯れるんです、何うしても遁げられない、免れられない約束事に成りました。」

唯、不意に花が散かゝつたやうに、軽い、優しい、柔かな、女の顔が胸へ来て、男は霞を吸ふやうであった、．．．．．然る中に、冷なる死の氷の、骨を貫くが如かりしは、はら／＼と觸るゝ、おくれ毛の薫であつた。

「可哀相だと思つて下さい、可哀相だと思つて下さい、露だけなりとも不便がつて下さいましな、

ね。」

男をとこの聲こゑは震ふるへたが、

「對手あひては。」と強つよく訊きく。

不思議ふしぎに調子ちやうし軽く女をんなが、答こたへて、

「兵隊へいたいさんなの。」

「軍人ぐんじんですか。」

「え、騎兵きへいさんですわ。」

「お待ちなさいよ。」七穂なほは、殺ころされる、斬きられ

て死ぬしぬとて、ひしと女をんなが縋すがつた時とき、思おもはず背せなに掛かけ

て居ゐた手てを、はつと取落とりおとしたやうに開ひらきながら、

「何なんだか、貴女あなた、助たすかる道みちがありさうに思おもはれま

す。」

「否いへ、不可いけません。助たすからうたつて駄目だめなんで

す………」

七穂なほの躲かしさうにする胸むねに尚なほ縋すがつて、

「堪忍かんにんして、もう些ちつと恚かうやつて置おいて下くださ

い。」

「貴女あなた、確たしかに串戯じやうだんだ。」

「さあ、屹きつと串戯じやうだんだとおつしやるから、それです

から、恚かうやつて暗い處くみでお話はなしがしたかつたんで

す、……でも、馴なれた所せ為みか、極きまりが悪わるい、

灰ほんのりお顔かほが見みえますよ。」

「私わたしにも見みえるんです。」

「仕方しかたがない、貴方あなたのが見みたければ、こんなでも、お目めにかけねば成なりません。貴方あなた、殺ころされる女をんなの顔かほは醜みにくいでせう。」

「否いへ、」

「いへ、影かげが薄うすいでせう、ぼんやりして居ゐるでせう、蒼あをざめて居ゐるでせう、可愛かほいい、優やさしい、貴方あなたのお顔かほは、ほんのりとして在いらつしやる、あの、切きり籠こどうろう燈籠とうろうの影かげが映うつつたやうに。」

「え、」

「そして、それを草葉くさばの蔭かげから見みるやうに、暗くらい、深ひかい、心細こころほそい、穴あなの底そこから覗のぞくやうに、棺くわんの中なかの女をんなの死骸しがいが、目めばかりあけて見みるやうに……」

七穂ななほのわななく手が、今度こんどは女をんなの袖そでを取とつて絶すがる。

「たよりのない、遺瀬やるせのない、果敢はかない私わたしを、死しが骸がいだと思おもつて抱だいて下ください、死骸しがいはたとひ、身からだ體たいはたとひお可厭いやでも、魂たましひだと思おもつて、堪忍かんにんして、一度いちど貴方あなた、抱だきしめて下ください、それなり、消きえるやうに、なくなりまますやうに、……」

犇ひしと抱だいたが、離はなして、よろ／＼と男をとこは樹きに、女をんな

は其の根に崩折れた。

「あゝ、嬉しい。此で思ひが届きました。堪忍して下さいまし、私は人間ではないのですよ。」

「あ、貴女は？」

「お化ではありません。」

「貴女は？」

「幽霊ではありません。」

「貴女は？」

「ですが、人間ではありません、其の御婦人ではありません。」

「貴女は？」

「非情のものです、草木です、木の幻です、枝の影です、花と云ふのは、恥しい、朧をたよりの色に出で、月に霞んだ櫻ですよ。」

「私は江月寺の櫻です。」

沈んだ顔が、ふと立つと、草葉の影を想はせた、  
 其の顔の色が甦つたやうに暗い中に浮いて、ものに  
 魅せられた如く、裳は緊つて、肩が震へて、

「私は、影です、幻なのです。ですけれども、此  
 の櫻は名木です。間に犀川と云ふ大川一つ隔てゝ居  
 て、此の公園と向ひ合つた、寺町と云ふ高い所に、  
 其の江月寺の堀越に廣い町幅一杯に、下が、犀川の  
 其の清い流の涯に梢が届いて、幹は襦袢の裾のやう  
 に靡いて、枝垂れの枝は、振袖を捌いて居ます。其  
 の襦袢も振袖も、唯霞です、花片です、雪が積つた  
 やうなんです。撓な姿、優しい容は、星を翳しても  
 月を乗せても、雲を被ても、倒れさうに重いんです  
 が、思ゆゑ、戀ゆゑには、風に揉まれて散るのも厭  
 はず、道を行く人の足に踏まるゝのも構はないで、  
 地に膝を伏せるまで、男に両手を伸ばして居ます。  
 ……其の男は、こがるゝ人は、此の公園の富士見櫻  
 が、それなんですつて、――

貴方は屹と御存じだと思ひます。

昔、義經主従が、山伏に成つて、安宅を越して、此の北國の海道筋を、大野の濱へ通る途中、此の樹の下にお憩ひだつたと言ひ傳へて、卿の君の記念に貽つて、（君櫻）と云ふにつけて、富士見のは、判官櫻と云ふんですつてね。」

「よく知つておいでゝす。」と茫然として見惚れたのが、漸つと心付いて聲を入れる。

「まあ、私ですもの、江月寺の君櫻は自分ですもの、知らないで何うしませう。

千年か、万年か、命は男に捧げても、記念も名も胎つて居たのに、其の木が、伐られて死ぬんです、滅びて了ふ、枯れるんです。…

斧で打ち、鋸でひき、劍で裂くのは軍隊です。これも御存じに違ひない。

此の名木のあります、寺の町端れに兵營が出来ました。其處が騎兵の聯隊に成つたのです。馬上で樹の下を潜るのに、馬の鬣が亂れます、旗を倒さねば

成りません、槍を伏せねば成りません。

槍は北斗の星をも貫き、旗は雲井に翻るべきもの  
なのです。鬘の亂れるのは、崩るゝ女の黒髪よりも  
大切です。

切られなければ成りません。枯れなければ成ら  
のでせう。

覺悟に未練は無いけれど、悲しいもの、貴方、情  
ないもの、貴下、果敢ないつたらないんですもの。

御國のためでも、戀は戀、情は情、恩愛は恩愛で  
す、……

私は今夜、夫と思ふ富士見櫻に、別を告げに、暇  
乞に、なごりを惜みに來たのです。

君櫻は朧の中を、花の精が抜出して、  
言ひかけて、寂しく笑つた。……

「ほゝゝ、と云ふわけなんです、貴下、心ばつか  
りなんですから、何うぞ、あの、お蔑み遊ばさない  
で下さいましな。」

「さげしむなんて以ての外です。」

彼は激したやうに言ふ。

「でも、一生懸命なんですもの。．．．  
貴方が御覽なすつたつて、富士見櫻の下に一人で立  
ちました時は、何ですか胸がせまつて、それなり消  
えて行きさうに、心が遠く成りました。．．．  
生意氣を申すやうですけれど、．．．花のもと  
にてわれ死なむ、．．．昔の歌にありますつて  
ね、．．．實際それつ切、死んで了ひたく  
成りましたよ。」

をかしいくらゐ。」

ふと聲も曇る。

「ひとりでに、露がこぼれるやうに涙がしまし  
た。」

「私は、東京で上野の奥に、世を離れて七年の間、墓に居るやうに住んで居ました。十六の年縁附いて、杯をしました三日目に、主人に亡くなられて了つたのです。」

主人は此國が故郷です、故郷の土には同じ草の芽ぐむ姿もあらうかと、密と参りまして三年に成ります。あの、江月寺の傍に主人の故い邸があります。」「あゝ、それは寺町御殿と俗に云ふ、子爵松村家の舊の館である。此の姫は、ある伯爵の妾腹で、世にもきこえた美女である。」

「相馬の古御所のやうな奥にかくれて、忍びづくりの二階から見えます。あの、君櫻の咲くのを、それでも樂みに視めて居ました。」

もう直きに、代つて了ふんだと云ひますから、餘り果敢なくつて、御主人へ暇乞に参つたのです。

私はなごりを惜みました。

櫻は何とも、云ひません。

思切つて、随分・・・お轉婆に引返したんですけれども、氣も心も、眞個に切られに行く、殺さ

れに行くやうで悄れ切つて居りました。それが、貴方のお目に留つて、死に、行く身と見えたのでせう。よく、然う御覽下さいました、それだと、花の心が通つて、私は嬉しい、本望なんです。

が、可哀さうだと思つて下さい、不便だと思つて下さい、貴方。」

と云ふと、投げるやうに身を寄せて、

「貴方、然うして、何か云つて下さい、言葉を掛けて下さいな。」

ですから、故と暗い處を選びました、君の櫻だと私を思つて、そして、貴方が、富士見櫻にお成りなすつて。

ねえ……三日添つて亡く成る時、私は、なごりを惜みました。

が、私が伐られて枯れると云ふのに、花は口を利かないのですもの、もの足りない、たよりが無い、思出して我慢が出来ない。

先刻、お呼留めなさると一所に、鬼でも、魔でも、其の人に、櫻に成つてものを言つて貰はうと思つたのです。それが貴方ぢやありませんか。

もし、後生です、一生の願ひです。

慰めて下さいまし、不便がつて下さいまし、私は  
伐られて死ぬんですよ。」

身をあせられて、男は震へた、……取合つ  
た、手に力が入れたが、散らすまじ、と花片に觸る  
ばかり、密と取り、密と取り、

「何とも申しやうがない、……私は、私は言ふこ  
とを知らんのです。」

「私も、もう、恚う云つたんです、極りが悪いも  
何にも知らない。さあ、行きます。行つて、あの  
富士見櫻の花の中に、貴下、お立ち下さいましな。

そしたら花の心が添つて、何とか云つて下さるでせ  
う。」

「此の顔色を、今と成つて、花の咲いた眞中へ持  
出されますものですか。」

「ぢや此處で、やつぱり此處で、……私ゆ  
ゑに御不足なら、其の時の、其の美しい方だと思つ  
て……」

「それなら留めます、死ぬなと云ひます、思直せ  
と云ふんです。」

「で、もし、其の方が、思留まらない、何うして  
も死ぬんだとしましたら、」

「……」

「よう、貴方。」

「……何うしませうな、何うしたら可いでせう。」

「貴方は、見殺しになさいますか。」

「絶體、絶命、見殺しにするかとは情ない。が、今の貴方のお身の上は、留める事も、活かすことも、助けることも出来ないではありませんか。」

「それぢや何うして下さいます。」

「これは、串戯ではありません。不思議な暗い森の中に、可怪い秘密があるやうで、私は身體が震へます。熱い血が騒ぎます、冷い汗が流れます。無念です、口惜い。が、虚空を掴んで置いて、他に云ふべき言葉はない。……雪子さん、いや、櫻の貴女、私も男だ、一所に死なう。」

「え。」

「一所に死にます、……然ういふより他は断じて知らない。」

\*  
\*

\* \* \* \* \* 17

十七

鶴つるが羽はがひをすばめたやうに、花はなの袖そでが重かさなると、  
恰あたかも美うつくしい魅物つきものの落おちたる如ごとく、雪子ゆきこの姿すがたは七穂ななほを  
離はなれて、ばたりと地つちに膝ひざを支ついた。

「あゝ、済みません、うまれてから、はじめまし  
て、優やさしい眞實しんじつな事ことを聞ききました、私わたしは嬉うれしい、霜しもが  
朝日あさひにとけるやうです。」

と思おもはず、聲こゑを忍しのんで泣なくのを聞きいて、男をとこも目めを  
壓おさへて、すゝり泣なきに泣なき出した。遣瀬やるせない涙なみだである、  
我われを忘わすれた涙なみだである、半なかばは嬉うれし涙なみだである。

雪子ゆきこが聲こゑを掛かけた。

「燐寸まっちをお點つけ下くださいまし。」

唯と見みると、雪子ゆきこの手てに、紙切かみきり洋刀ナイフの青あいのがあつ  
た。片手かたてに櫻さくらの小枝こえだがあつた。花はなが紅くれなゐに目めに立たつま  
で、其その指ゆびは白しろかつた。

「今夜こんやの記か念たみにしませうと思おもつて、小ちひさな枝えだを切き  
つて來きました。これこれを承知しやうちしてくれましたか、花はなは

ものを言ひません。樹の心は分りませんから、密と内證で持つて居ました。……櫻にお成り下すつた今の貴下のお心で、許すとおつしやつて下さいまし、私は夫に聞いて、髪に插したう存じます。」「指を反らして鬢の毛へ、婀娜めくまで、頸も白く待つものを、彼に否まむ術ありや。

「花も崇れ、月も怒れ、魔も呪へ、お心に任せます。」

「嬉しい私は。……お言を受けました心の記に……」

「やあ、貴女。」

いま、洋刀を取る、帯の紙入と、もに落した、懐紙に小指の腹を。流星の如く鋭き刀尖を當つると見た。

飛菟る時既に遅矣、もぎ取つたと思ふ洋刀は、それは雪子が棄てたので、落ちる燐寸の消える時、血汐は牡丹をほとばしらす。

「飛んだことをなさいます。」  
と彼は唸るやうに言ふ。

「縁があつて添つた人にも、三日で分れた覚えがあります。苦みは三年五年、悲しみは七年、九年、

嬉しいのは瞬く間、其の瞬く間の心のまゝに、思つたことをしないぢや、死ねば又地獄なんぢやありませんか。

はしたない、娼妓、女郎のするやうな事をいたしました。ですけれど、唯一息に、心のまゝ、思ふ通りにすることは、女の身は、もしか、それが女なら、天女と云つてもおなじです。人妻もおなじです。．．．．

私は、貴方が、なりかはつてお許し下さつた、一枝の、花のかはりに切りました。が、汚らはしいもの、貴方はお受取り下さいますまい、．．．．貴方には差上げません。おなじ櫻の花片も流れ傳つて、白絲の瀧に沈みませう。私は水に流します。」

男が呼吸迫つて、もの言はぬ間に、琴は切れた、流が止まつて、一粒其の大きさ、白銀の星の如き眞珠の落ちた音が響く。切つた小指を棄てたのである。我をとともに、落ちて沈まむとする如く、思はず衝と立つた、七穂の肩を、何と、榮螺山の崖の樹の枝から、トンと敲いたものがあらうではないか。

「君、君。」

七穂は驚に掴まれたやうに、呆れ果てるばかり身

が窘んだ。

「驚いては不可んよ。僕は人間だ。が、こんな所から唐突に肩を叩いて、磊落だなんて後でも思ひ給ふなよ。．．．．はじめ逢ふんだから挨拶が廻り遠い、早く要領を得たいばかりだ。」

少し傍へ退いてくれ給へ、今、其處へ飛下りる。ざわ／＼と枝が鳴る。

彼は腰に、長劍を帯びたが、身軽く其の音も立ないで、たゞ、カチンと長靴についた拍車を鳴らして下立つた。

「騎兵中尉小笠原武一です。直接に貴婦人には失禮だから、君から申次いでくれ給へ。江月寺の君櫻は伐らずに済まさう。」

少くとも、出来得るだけ、僕が能ふだけ保護をします。「と嚴に云つた。」

調子が碎けて、

「元來ね、彼を伐らうと云ふ張本人は我輩なんだ。固から問題には成つて居たさうだが、急に伐らんでも差支はなかつたのだ。．．．．僕は九州の方から轉任して近頃来たがね。．．．．此の土地の人心を殆ど掌握して居る、本願寺方面から、或筋に手

をまはして、それで伐らずに置くと知れたから、出過ぎた坊主め。

遣つ了へ！ だが遂行が捗取らん。．．．我輩蠻勇を振つたね。即ち、一隊を率ゐて通つて、自分で、あの道路へ出張つた櫻の梢へ俯向かずに面を打つけて、頬げたに鍵裂を拵へた。

と云ふわけさ。これを笑はゞ笑ふべし、僕も指を切つた事を笑ふ。お互でせう。と、くす／＼笑つた。

## 十八

「夫人、禮をおつしやいまし。」  
七穂が聲を掛くると、雪子は、從容として立つた。おさへた指を其のまゝに、威儀正しく手を垂れた。

「氏神様と存じ上げます。」

「氣取つて御會釋を受けませう。」

青年士官は舉手して揖した。

「それから謹んで凡人の御挨拶を申し、唐突の缺禮を貴婦人に向つて謝します。又更めておちかづきを願ひます。君（一所に死なう。）は嬉しかつた

ね。・・・奥さん、指をお切んなすつたのは、

蓋し痛快を極めましたな。・・・戦争のない時

は、貴方がたが、こんな事してくれないと、空気が

だらけて不可ない。軍人に用意があります、奥さん、

繃帯を掛けてあげませう。」

「あゝ、何よりです。」

「否、構ひません、可いんですよ。」

「卑怯でないです。・・・名譽の御負傷、情

を以て理に勝つた。織手、小細工な杓子定規の大軍

を破る事、貴女の如きは少い。僕は、戦ひ勝つた將

軍の負傷を御介抱申上ぐる光榮を有するのです。君

麟寸を何うか。」

雪子は端然として、手を投げて、

「櫻さへ無事でしたら、もう一節切りませうか。」

艶麗に打微笑む。

「僕が誓つて切らせません。」

呀、石の橋が、からんと鳴る。と續いてからんと響く。

揃つて三人が屹と視ると、其處に中山高を被つた悄乎とした男が立つて、石橋の欄干を盲目なぐりに突廻す。．．．下川忠雄檢が、狼に似た虎石の陰に、腹を引摺るやうに脊筋を敵らし、蛇のやうに潜んで居て、此時のろりと立つたのである。で、杖を廻しながら、

「ふゝん、ふゝん。」と鼻で笑ふ。

氣早な中尉が、

「何だ、き様は？．．．」

故と聞澄ますやうに、向うから耳を出して、

「然うおつしやりみすのは軍人さんけえ。．．．」

．先刻から聞いて居りみして、知つとりみすがに、騎兵中尉閣下けえ。」

不斷は繕つて東京がるのが、本能の膏汗の如きねば／＼とした土音を發つ。其の聲に、饅えた糊の臭氣がある。

「何が閣下だい、閣下が何うした。」

「貴方、臭いぞに、臭いぞに、や、臭うはないか

いに。」

と横おしに摺つて寄る。

「今日ぢやにい、此の社會に於てぢやにい、

苟もやわい。些少と伺ひみすが、國家の軍人たるべ

きものがぢや、婦人の氣に入らうてゝ、其の言ふこ

とを肯いて、裏に成つたり、表に成つたり、魂を翻

してもだんないものでございみすき。其でも、其で

も、

杖の尖を細く叩いて、

「可いものき。大事なものでござりみすきいに、

やあ、閣下。」

中尉の音調は、打沈んで、怒りを帯びた。

「き様は不具だな。」

「然うや、不具や、こん、不具やともいに。不具

やけれども眞人間や。人間の歩行く道は明るいもん

や。そやさかいで聞きみすがやき。美しい婦人のた

めなら、魂を裏返しにしても可いものき。軍人たる

べきものがやに。――江月寺の櫻は伐らいでもだ

んないけえ。返事はないのき、出來んのき。ほした

ら新聞でゞも、公會堂の議員さんからでも、更めて、

表向きに聞かせしましよかに、何うやき、閣下。」

「小笠原さん。其は土着の動物です、此の國には穴居時代の、こんな、蜘蛛が澤山居ます。奇怪な道徳の巢を編む蟲です。……様子に分らないと扱ひ悪い。貴下は雪子さんをお伴ひ下さいまし。お先へ何うぞ。私があとで始末を着けます。」

「否。」

中尉は鋭く拒んだのである。

「僕が處決します。――奥さん……、先刻樹蔭から承はつて、ぞく／＼するほど嬉しかった、貴女のお言葉を、こゝに繰返す光榮を有します。」

中尉は凜々たる音聲にて、

「槍は北斗の星をも貫き、旗は雲に翻るべきものなのです。駒の鬣の亂れるのは、崩れる女の黒髪よりも大切です。……槍を伏せ、旗を捲き、鬣を亂す、櫻を伐らねば成りません。僕は面縛してそして、願ふ。奥さん、お生命を下さい。……江月寺の櫻を更めて伐らして下さい。」

「えゝ、お伐んなさらないで何うします。……櫻に代つて申します、お伐んなさいまし、喜んで私の命を差上げます。」

「獣め、分つたか。」

柄<sup>つか</sup>を離<sup>はな</sup>すと、鏘<sup>しやうぜん</sup>然<sup>ぜん</sup>たり、長<sup>なが</sup>き劍<sup>けん</sup>。  
「森<sup>もり</sup>を出<sup>で</sup>ませう、お二<sup>ふたり</sup>人<sup>り</sup>。・・・」

毒の溢れた紫色して、黄なる齒をむき唇を震はせながら、三人を見送つて、蛇の轟したる如く、背畝りして突立つたが、

「馬鹿奴。」

杖をからりと落すと、忠維は、ぐるりと帯を解いた。羽織ぐるみ、ずる／＼と樹にかけて、骨も露に素裸に成ると齊しく、前の細流へ巖入りに入った。ばちや／＼、ばちや／＼、寺の鐘が、幽に一つ響くまで、何をして居ると思ふ。

「はてな、何ぢやい。」

こゝに近い、繪葉書屋の小店から、亭主提灯をつけて、寝惚目をこすりながら、見廻りに出て来た。

ばちや／＼、ばちや／＼……

「強う、水が騒々しい。」

唯、越中禪で水の中を這廻る、ばちや／＼ばちや／＼。黄色な獺に驚く間もない。

「此は何や。」と、亡者が燈明を強請るやうな手を出した、忠維の掌に提灯をさしつけて、

「花やないかい。」凝めて視て、わあ、と言

ふ。

・  
・  
・  
・  
・

【完】